

沖縄県立
埋蔵文化財センター
企画展

沖縄

いのく
考古学



平成 23 (2011) 年度 10月 18 日 (火) ~ 11月 20 日 (日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

もくじ

ごあいさつ	1
展示のあらまし	2
第1章 いしと暮らす	3
先史時代／先島の先史時代石器／歴史時代	
■column1 沖縄の石造文化	6
■column2 沖縄に持ち込まれた石—先史時代—	7
第2章 いしに飾られた琉球王国	8
円覚寺の石造物／金剛力士像／仏塔／石碑／崇元寺の下馬碑	
■column3 沖縄に持ち込まれた石—アーチ時代—	12
第3章 いしの宝物	13
■column4 沖縄に持ち込まれた石—近世・近代—	14
第4章 いしに込めた祈り	15
■column5 勾玉について	16
参考文献一覧	

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「沖縄いしの考古学」を補完するものとして編集した。
2. 本書の執筆は大堀皓平と金城貴子が、補筆を金城亀信が行った。
3. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。
4. 展示資料の名称は出土遺跡の発掘調査報告書に従っているが、同じ資料に対して報告書ごとに異なる名称で報告されているものや、報告後の研究などでよりふさわしい名称のあるものは、担当者の判断で名称を付けてている。

協力者一覧

この企画展を開催するにあたり下記の機関に多大なご協力を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます。

(写真提供)

糸満市教育委員会
浦添市教育委員会
北谷町教育委員会
南城市教育委員会
読谷村立歴史民俗資料館

ごあいさつ

「石」は人類の歴史の中で最も古くから使われてきました。沖縄でも先史時代から近代までのほとんどの遺跡から出土し、その種類も多種多様です。

まず「石」は生活用具として様々な場面で使われています。特に金属が発明される以前であったり、生活の主役でなかった時代では、生活に欠かせない道具として活躍してきました。

歴史時代になると、「石」の遺物には建築に関わる礎石や石造彫刻、石碑などもみられます。首里城とその周辺の遺跡からこれら様々な石造物を見ることができます。

さらには、神秘的な色彩と透明感をもつ玉器は実用性を超越した宝物として、勾玉や玉は装身具以外に現代の我々には理解の難しい思想・信仰に関わると考えられる祭祀用具に使われています。

以上のように「石」は沖縄の歴史にとても深く関わりをもっていることが分かります。

この企画展では、沖縄の遺跡から出土する様々な「石」の製品や沖縄の人々と「石」との関わりを紹介することで、より沖縄の歴史や「石」の文化に触れて頂くことを目的としております。

当センター所蔵の出土遺物の中から代表的な「石」の製品を選んで、当時の人々がどのように「石」を利用してきたか、皆様がご理解いただけるように、それらをテーマごとに観覧できる展示方法を探っております。いずれのテーマでも「石」の製品のもつ価値や魅力を感じて頂けるよう努めました。

当企画展が沖縄の歴史と文化および文化財への関心・理解を深めるとともに、先人たちの暮らししぶりを思い浮かべることで自分たちの日々の生活を見つめ直すきっかけとなりましたら幸いです。

平成 23 年 10 月 18 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 大城 慧

展示のあらまし

本展では、展示資料をより理解頂けるように4つのテーマに分けて展示しました。資料によっては、勾玉や玉のように装身具以外に祭具としての機能を併せ持つものもありますが、本展示では石器・石造物・石製品を主たる機能と想定される以下の各章に当てはめて展示をしています。

「第1章 いしと暮らす」では、主に様々な実用品を中心で展示しています。ここでは「先史時代」「先島の先史時代」「歴史時代」の3つのカテゴリーに分けています。先の2カテゴリーでは同じ時代の両者の共通点や違いについて見ていただき、次の「歴史時代」では石の道具の変遷を通じて、石の担った役割の変化をご覧下さい。

「第2章 いしに飾られた琉球王国」では、首里城跡とその周辺の遺跡より出土した石造物に焦点を当て、それらの展示資料から琉球王国の石造文化の豊かさを想像することができます。

「第3章 いしの宝物」では、玉製の器など国内でも稀少な玉製品を観覧頂きます。

「第4章 いしに込めた祈り」では、勾玉をはじめ信仰や祭祀に関わったとみられる不思議な石製品を通じて、当時の世界観に思いを馳せて頂ければと思います。

本展の展示資料である石器・石造物・石製品は、無駄のない形状のもつ機能美、見事な製作の技、秀麗な彫刻、そして実際に使った痕跡を見せてくれます。このような視点も含めご覧頂くとさらに楽しむことができるはずです。

～展示をより理解して頂くためのキーワード～

石器 石を材料として作られた尖端的な道具。特に先史時代のものに対して用いられる。石器には時代や地域で様々な種類があり、それぞれに製作方法や機能がある。これらを明らかにして当時の人の活動に迫るのが石器研究である。

（礫石器） 石をほぼ無加工でそのまま使用する石器。例えは敲石類。

（打製石器） 石を打ち剥がすことで製作される石器。打製石鎌など。

（磨製石器） 石を最終的に磨くことで製作される石器。磨く前段階には打剥や敲打などの作業を行う場合が多い。磨製石斧など。

石製品 石製の装身具や信仰に関わる製品。また先史時代が石の実用品を「石器」と呼ぶことに対して、歴史時代の場合は石で作られる道具を総称してこの用語を用いる場合が多い。

石造物 石像や石碑など、大形の石製品。石造物は考古学のみならず美術・建築学と関わる点も多い。

石材 石の道具の材料となった石の種類。石材からは石器ごとの石材選択や製作方法の違い、また石材産地を基にした人間活動の範囲、交易活動などを知る有力な手掛かりとなる。石の種類を調べるために岩石学的な知識が必要であるため、岩石学者に依頼して鑑定を受ける場合が多い。

玉 ヒスイや碧玉など主に火成岩起源の美しい石のこと、数種類の鉱物結晶が集合して構成される。ちなみに宝石は1種類の鉱物結晶である。

先史時代 文字による記録が残されていない時代。沖縄では主に旧石器時代・縄文時代・弥生～平安並行時代が該当する。

歴史時代 文字による記録が残されている時代。沖縄ではガスク時代以降が該当する。

(大堀晴平)

第1章 いしと暮らす

-stone tools-

沖縄で明確な石器は約6,000年前頃から出現します。以来、石材の限られた沖縄でも様々な石の道具が使われてきました。この章では遺跡から出土した代表的な資料から、沖縄の石の道具の変遷を概観します。

先史時代

先史時代の遺跡からは様々な石器が見つかっており、生活を営む上で不可欠な道具であったことが分かります。沖縄の石器は縄文文化の影響を受けつつも、より略式で種類が限られているなどの独自色も垣間見られます。また黒曜石やチャートは打製石鎌に、緑色岩が磨製石斧に、そして砂岩は敲石類と、製作方法や使用目的に合わせて石材が選択されている点も注目されます（column1参照）。



写真1 先史時代の代表的石器

上段：左より球状石器、敲石類、クガニ石
(高嶺遺跡、平敷屋トウバル遺跡)

中段：左より磨製石斧・砥石
(野国貝塚、西長浜原遺跡、高嶺遺跡、大山富盛原第二遺跡、平敷屋トウバル遺跡)
下段：左より石鎌、石核、小型扁平利器、颪状石器、小形石斧
(シヌグ堂遺跡、地荒原遺跡、鏡水箕瀬原A遺跡、野国貝塚、西長浜原遺跡)

敲石類（写真1の上段）

河原や海岸などにある石をそのまま道具として用いたもので、使用に際して生じた敲打痕（道具の製作や貝などを打ち割った際に生じた痕跡）やシイの実などの堅果類を磨り潰したことを示す研磨（摩滅痕）がみられます。先史時代を通じて使われた石器です。敲石類は平坦部を研磨、側面を敲打に使った複合的なものが主流です。しかし中には球状のもの（上段左）や柑橘類の果実の形と似ていることから名付けられたクガニ石（上段右）など、形状は様々です。

磨製石斧（写真1の中段・下段右、写真2）

石に打剥（打ち剥ぎ）・敲打（打ち欠き）・研磨の工程を経て作られるのが磨製石斧です。主に樹木の伐採や木工な



写真2 磨製石斧と未成品（高嶺遺跡）

右手前のものが典型的な製品。左奥は20cmを超える大形品、右奥は打剥調整段階の未成品

どに用いられたと考えられます。大小の違いをはじめいくつかの形がみられるほか、磨きも全面光沢をなすまで磨くものがある一方で刃部のみ磨かれるものなど様々です。沖縄の縄文時代では最も主体となる石器ですが、弥生時代に並行する時期からは数が少くなります。

石鎚（3ページ写真1の下段左、写真3）

石核（写真1 下段中央）から剥がされた剥片に押圧剝離を加えて整形した打製石器で、弓矢の鎚として狩猟などに使われていたと考えられます。本土の縄文時代と比べて、沖縄では出土数が極めて少ないと、出土する時期がほぼ縄文時代後・晩期に限られるなどの特徴があります。また弥生時代になると九州から持ち込まれたとみられる磨製石鎚が県内から数点見つかっています（写真1 下段右から7点目）。いずれも九州をはじめ本土との文化的な繋がりを窺わせる資料です。



写真3

打製石鎚（シヌグ堂遺跡、高嶺遺跡）
手前の打製石鎚は特に出来の良い製品となっている。全てチャート（堆積岩）製。

小型扁平利器（3ページ写真1の下段中央）

薄い板状の石を磨いて刃部を作り出した簡易的なもので、縄文時代後・晩期にみられる沖縄独特の石器です。用途はよく分かっていませんが、近年の研究で沖縄の多種多様な貝製品を製作する際に用いられた道具である可能性が指摘（山野 2010）されています。

先島の先史時代石器

先史時代の先島（宮古・八重山）諸島は沖縄本島との交流がなく、南方系の文化の影響をうけた說もあるように（大濱 1999）、石器も独特なことがあります。例えば、沖縄本島でみられる石鎚が先島諸島ではみられませんが、石製ドリルは先島諸島にのみ見ることのできる特有の石器です。さらに石斧のバリエーションや製作方法も異なります。このように、石器からも先史時代の両地域に異なる文化が形成されていたことを見て取ることができます。



写真4 先島諸島の代表的石器 上段右：敲石（下田原遺跡）

下段右：石製ドリル（下田原貝塚、トゥグル浜遺跡）

それ以外：磨製石斧（下田原貝塚、トゥグル浜遺跡、長間底遺跡）

歴史時代

金属製品が本格的に登場するグスク時代になると先史時代にみられた石器は姿を消ていき、変わって滑石製品や金属専用の砥石、また石弾など戦いに関わる資料がみられるようになります。狩猟採集社会から大きく変わった様子を見て取ることができます。さらにグスク時代後半から近世・近代と時代が下ると、文房具類やキセルなど現代と共に通ずる道具がみられるようになります。



写真5 歴史時代の代表的な石製品

上段：左より滑石製品（後兼久原遺跡、新城下原第二遺跡）、
石弾（首里城跡御門地区・下之御庭地区、渡地村跡）

下段：左より硯（首里城跡書院跡之間地区・御門地区・御内原北地区、天界寺跡、ナカンダカリヤマ古墓群）、
石筆（慶来慶田城、首里城跡石板門地区・御内原地区、真珠道跡）、
磨製石斧（首里城跡上の毛地区、慶来慶田城）、
キセル（湧田古窯跡、古我地原内古墓群）、
砥石（首里城跡御内原地区・歓会門久慶門地区・下之御庭地区、南殿）、
七厘（首里城跡御内原北地区）

滑石製品（写真5 上段左）

滑石製石鍋の破片とその二次加工製品であるバレン状製品（上段左より2番目の2点）。滑石製品はグスク時代の幕開けを象徴する資料です（column3 参照）。

石弾（写真5 上段右）

砂岩などを丸く敲打整形して作られた石製品で、煤の付着するものもみられることから火砲の石火矢の弾として使われたとみられます。

七厘（写真5 下段右）

現在でもみられる七厘にも、石製のものがしばしば出土します。暖をとる道具として使われ、内面に付着する煤が使用されたことを裏付けます。なおこの資料は首里城跡御内原出土であり、当時の女官も使っていましたとみられます。

磨製石斧（写真5 中央）

磨製石斧は首里城跡からもしばしば出土します。縄文土器も出土する所以先史時代の石斧とみられています。しかし『おもろそうし』（1623年編纂）第20「こめすおもろの御さうし」には石斧「いしうの」が登場しますので、これらの資料は歴史時代の石斧の可能性も考えられます。もしかしたら首里城跡で使われていたのかもしれません。

キセル（5ページ写真5 下段中央）

グスク時代の後半から近世にかけてみられる円筒形のキセルには、まれに石製のものがみられます。砂岩や泥岩など比較的入手し易い石材が使われています。円筒形キセルの多くは瓦製なので、素材がないなどの理由で石が代用されたと考えられます。一方で1点のみ珊瑚製のキセルも出土しています（写真6）。これは中国からの輸入品とみられる点で注目されます。



写真6 水石製キセル
(湧田古窯跡)

石製文具（5ページ写真5 下段左）

遺跡からは硯をはじめ、石筆・印章などが出土しています。硯は石製文具で最もよくみられるものですが、中には所有者の住所や名前が刻まれるものや、壊れたものを再加工したもの、墨を研ぎ易くするために刻みを入れたものなどもみられます。石材や生産地も様々です（column4参照）。石筆は現在のチョークのようなもので、石盤に字や図画を描く際に用いられました。印章は僅かしか出土していませんが、共に近代のもののように見えます。石材は石筆・印章とともに蠣殻や滑石が使われています。

砥石（5ページ写真5 下段キセル右隣）

砥石は特に短冊状のものがこの時期に特徴的にみられ、金属の刃物を研ぐ磨刀石の可能性が挙げられます（上原2010）。磨刀石は中国への輸出品にも含まれるもので注目される資料です。石材は頁岩・粘板岩などが多く用られます。また金属製の刃物の仕上げ磨きに用いられたとみられる軽石製の砥石もしばしば出土します。砥石は先史時代から現代まで生き残った唯一の石器です。過去と現在を繋ぐ砥石は改めて評価すべき道具と言えます。

（大堀皓平）



写真7 砥石 (5頁写真5と同じ)

【column1】沖縄の石造文化

私たちの身近にはグスクの石積みをはじめ、石畳道や石門、石橋、家の塀（石垣）、井泉、墓、御嶽など様々な石造構造物を見る事ができます。これらの石造構造物は、沖縄らしさを特徴づけるものであり、沖縄の文化を代表する一つとして石造文化は見逃せません。中でもグスク建築は、石のもつ永遠性、石にそなわる莊重性をして出来上がった土木技術の傑作とされ、石造文化を代表するもの一つになっています（當眞1988）。

沖縄でグスクが築かれた頃の日本本土では、まだ石垣をもつ城は見られません。つまり、沖縄では本土よりも約150年以上も古い時期からすでに石積みを築く技術があったことがわかります。また、沖縄で最初に造られた石橋は長虹堤^{ちよこうてい}とよばれるアーチ橋です。これは日本本土よりも約200年以上も古い時期に、中国からアーチ工法が伝えられて造られたものといわれています。どちらも興味深いものです。

（金城貴子）

【column2】沖縄に持ち込まれた石 一先史時代一

まだ金属がなかった先史時代では、石器の素材となる石は食料と同じく生きていくための重要な資源でした。しかし石器石材はどのような石でもよいわけではなく、例えば石鎌には鋭さが求められるため黒曜石やチャート、石斧には硬さや粘りが求められるため緑色片岩や輝緑岩といったように、先史時代の人々は石器の種類ごとに石材に向き不向きがあることを知っていました。そのため石器の種類ごとに様々な土地から良質な石材を求めていたようで、県内では沖縄本島北部や慶良間諸島・久米島、また九州との交易からは黒曜石やヒスイが持ち込まれてきます。例えば那覇市の鏡水箕隅原A遺跡では31種類、901点（15 kg）の石材が持ち込まれていますが、そのほとんどはチャートや緑色千枚岩などの本島北部や慶良間諸島で採れる石材でした（写真8）。当時の人々の活動範囲がかなり広域であったことを物語ります。

さらに鏡水箕隅原A遺跡の石材の中には県内で産出しない黒曜石も含まれていました。沖縄本島や奄美諸島では、縄文時代の後・晚期頃の遺跡から稀に黒曜石とヒスイが出土しています。理化学的な方法によって、黒曜石のほとんどは佐賀県の腰岳産、ヒスイは新潟県糸魚川産のものという分析結果が得られています。このような琉球列島以外からの石材搬入の証拠は、沖縄と本土の縄文文化との関係性をうかがわせる重要な証拠となっています。

石材をテーマとした研究は近年注目される手法で、研究の進展により今後もさらなる新発見が期待されます。

（大堀皓平）



写真8
鏡水箕隅原A遺跡出土の各種石材
写真左下にある黒い石材が黒曜石
(写真9 下段右2点と同じもの)

写真9 黒曜石製石器とヒスイ製品

黒曜石製石器
(古座間味貝塚、高嶺遺跡、
地荒原遺跡、新城下原第二
遺跡、鏡水箕隅原A遺跡)
ヒスイ製品（高嶺遺跡）

黒曜石は主に石鎌や刃物、ヒスイは
垂飾に用いられていた



第2章 いしに飾られた琉球王国

-stone monuments-

石は実用品だけでなく、様々な彫刻を施することで、建造物や空間を飾る演出にも使われました。これらは大型の製品が多く、石造物と称されます。主なものとしては、欄干（回廊や橋に取りつけた手すり）の飾りや龍柱、礎石などがあります。特に欄干の飾りは、繊細な彫刻が施されたものが多く、建造物を優雅に飾りました。石に彫刻を施した製品としては、鳥や亀など、動物を象ったものや、金剛力士像なども見つかっています。

素材をみると、粗粒・細粒砂岩（ニービヌフニ・ニーピ）や琉球石灰岩の他、鹿児島県産の可能性が高い安山岩（ようさんざん）や溶結凝灰岩、中国の輝緑岩（けいりゆうがん）（あれいろいわ）を用いた製品もみられます。



写真10 首里城正殿の復元された欄干と大龍柱（南より）

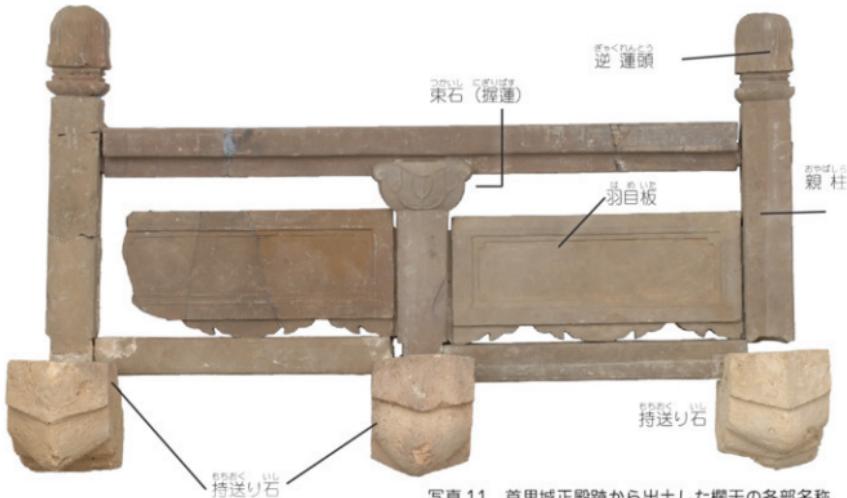


写真11 首里城正殿跡から出土した欄干の各部名称



写真12 円覚寺跡の復元された放生橋



写真13 勾欄柱（親柱の頭）
(円覚寺跡)

えんかくじ せきぞうぶつ 円覚寺の石造物

円覚寺は1492年に建立された琉球王府最大の仏教寺院で、沖縄戦により破壊されるまで首里城の北側に存在していました。円覚寺の建造物や内部空間は、様々な装飾で飾られていたことが古写真などの資料から知ることができ、その格式の高さがうかがえます。ここで石に注目すると、放生橋や建物の基礎として石が用いられており、中には、華やかで繊細な彫刻が施されたものもみられます。石材の多くは中国の福建省周辺で産出される輝緑岩（青石）と確認されており、当時、彫刻の材料としてこの石材は多用されました。輝緑石は質的に硬い性質を持ちますが、細部の表現に適した石材と考えられます。このように主要な建造物には中国産の輝緑岩が積極的に取り入れられます。その背景には、東アジア交易を通じた琉球と中国との密な関係が存在したことを示しています。



写真14 さまざまな彫像

上：龍柱

(首里城跡・書院・鎖之間)

下左：鳥形石製品

(首里城跡・城郭南側地区)

下右：亀形石製品

(首里城跡・石投門地区)

こんごうりきし にねうぞう 金剛力士（仁王）像

金剛力士（仁王）とは、仏敵から仏の世界を守る護法神で、口を開けた阿形と、口を閉じた吽形を一対として寺院の門の左右に置かれます。

天界寺跡から見つかった2体の石像は、頭部及び腕などの四肢は欠損し、上半身部分だけのものですが、たくましい筋肉が彫られた胸の両脇から首の後ろにかけて、裸体に天衣をまとっていることにより、金剛力士（仁王）像と考えられます。石材は溶結凝灰岩で、鹿児島県産の可能性が高いとされています。

写真 15

【左】金剛力士（仁王）像・裏
【右】金剛力士（仁王）像・表

天界寺跡
高さ 66 cm
最大幅 47 cm
最大厚 39 cm



写真 16

【左】金剛力士（仁王）像・表
【右】金剛力士（仁王）像・裏

天界寺跡
高さ 61 cm
最大幅 53 cm
最大厚 39 cm



ぶつとう 仏塔

肩部から胸部にアラベスク文と仏、下部に蓮弁文が彫刻されています。底面に窪み跡があることより、単体で使用されたものではなく、今のところ仏塔は石屏子の蓋屋根に乗せて「宝珠」（写真 22 参照）として使用されたものと考えられます。

この仏塔はナカンダカリヤマ古墓群（那覇市首里金城町）のある丘陵縁辺部（崖沿い）から工事中に発見されました。かつてその丘陵上には、大日寺（尚質王代 1648～68年創建）とよばれる真言宗の寺院がありました。石材は輝緑岩とみられます。

写真 17 仏塔

幅 31 cm、高さ 50 cm、
底面直径 26 cm、重さ 55 kg

せきひ 石碑

石碑とは、石に文字を刻んだものです。硬い石に文字を刻むことで、記録の永続性を期待したものと考えられます。

琉球王国では、尚真王（1477～1526年）が在位した15世紀代より、琉球王国が解体する19世紀末まで、首里と那覇を中心に多くの石碑が建立されました。これらの石碑には王府が実施した事業を記した記念碑や王家の墓碑を中心に、士族や富農の墓碑、梵字碑などがあります（安里1991）。



写真18
首里城瑞泉門脇に復元された「源遠流長」の石碑



写真19 石碑「源遠流長」
(首里城跡・歓会門・久慶門地区)

縦位置で設置された石碑の破片。中央に「源」とその右に「道光戊戌」という文字が確認できることより、尚育王（在位1835～1847年）の冊封使である林鴻年が、1838年に琉球を訪れた際、首里城の龍樋の水を賞し、龍樋の水が尽きないことを表現して、「源遠流長」（源遠ければ、流れ長し）と讃えたものとわかります。材質は粗粒砂岩（ニービヌフニ）。

そうげんじ 崇元寺の下馬碑

崇元寺は琉球王朝時代の国廟として舜天王以下、歴代の国王の神位が安置されていた寺院です。1527年頃に完成したと考えられています。崇元寺の石門の東に建立されたのが下馬碑です。

碑頭に日輪と鳳凰瑞雲を施し、中央に「あんしもけすもく満にてむまからおれる扁し」（訳：按司も下司もここで馬からおりるべし。）とかな文字で刻銘されています。

日輪双鳳雲文は琉球独自の文様であり、日輪は国王の象徴、鳳凰文と瑞雲文には英明な君主の出現と豊穰が意味されています。「太陽神の末裔たる国王に治められ繁栄している王国」という王国思想が象徴化されたものといわれています。15世紀末頃に登場した日輪双鳳雲文は、島津氏による琉球征服を契機に消滅していきます。石材は頁岩とみられます。（金城貴子）



写真20 崇元寺の下馬碑

【column3】 沖縄に持ち込まれた石 一グスク時代一

グスク時代開始期（11世紀末頃～12世紀初頭）の遺跡からは、共通する遺物が出土するようになります。中国産白磁、徳之島のカムイヤキ、そして滑石製石鍋です。滑石は長崎県西彼杵を中心に採掘されたもので、これを加工した石鍋は九州を中心に西日本一帯に流通しました。石鍋の流通は琉球列島全域に及びます。軟質で加工しやすい滑石は貴重な資源と目されていたことがうかがえ、奄美諸島や沖縄本島ではバレン状製品（温石：病気の際に体を温めるもの）を代表とする滑石製石鍋を再加工した製品もしばしば出土します（写真21）。

一方グスク時代の中頃以降（13世紀～16世紀）には、石造物の中に中国福建省産の輝緑岩（青石）を素材とするものがみられます。代表的な製品に浦添ようどれの3号石厨子（写真22・14世紀末～15世紀前半）や円覚寺放生橋（1498年）、石碑の「官松嶺記碑（建立1497年）」などが挙げられます。特に尚真王代（1477～1526年）の石造物に青石は多く用いられます。青石製の石造物は近世頃になるとみられなくなりますが、その背景には薩摩侵攻によってそれ以前の交易と変化した可能性が指摘されています（神谷1999）。青石製石造物は見事な彫刻美のみならず、グスク時代から近世にかけての琉球と中国との関係を理解する上で重要な資料です。

（大堀皓平）

写真21
滑石製石鍋（右）と
バレン状製品（左）



写真22
青石で造られた浦添ようどれの3号石厨子
(浦添市教育委員会提供)。

3号石厨子に施された仏像彫刻は、沖縄で作られた可能性が高いという見解もあります（知名2005）。

第3章 いしの宝物

-stone treasure-

石の中には、精巧に磨かれることで美しい光沢を放つものがあります。そのため石は実用品のみならず宝物の材料としても使われていました。その中で特に珍重されてきたのが「玉」です。光沢や透明感のある玉は、中国で8,000年以上にわたって愛好されてきました。沖縄にも中国と同様に、石や玉を素材とする宝物とみられる製品が首里城跡周辺を中心に出土しています。沖縄に「玉」の産出地がないことや出土した杯や盤の特徴などから、おそらく明・清代（1368～1911年）頃に中国からもたらされたと考えられます（北京故宮博物院編2008）。多彩な貿易陶磁器と同様に、これら玉石製品も琉球王国の繁栄を物語る資料です。

（大堀晴平）

写真23 玉碗・玉杯・玉盤

上段：左より首里城跡城の下地区、

首里城跡木曳門跡地区・用物座跡地区
・石曳門地区、中城御殿跡

下段：左より中城御殿跡、

首里城跡石曳門地区、潮原古墓群、
首里城跡木曳門地区・用物座地区

中城御殿跡

中には装飾や字が刻まれるものもみられる。職人の持てる技術と時間をかけて作られた精巧な品である。



写真24 不明玉製品

左より中城御殿跡、天界寺跡

首里城跡所地区、

首里城跡城の下地区、

首里城跡所地区

下段：首里城跡黄金御殿地区、真珠道跡、

首里城跡城郭南側下地区

破損により器種不明の資料も多く、今後の研究が期待される。



写真25 石製容器

上段：角皿

下段：丸皿

中城御殿跡で発見された資料で、
精巧な装飾が施された資料。現在
のところ国内でも類例資料が得ら
れていらない。

【column4】 沖縄に持ち込まれた石 一近世・近代一

石製品・石造物のうち、近世と特定できる資料は稀です。年代が判然としてくるのは近世末頃からになりますが、この頃になると中城御殿や弁財天堂の石灯籠など沖縄では産出しない安山岩や溶結凝灰岩で造られたものがみられるようになります。近世の作とされる天界寺の金剛力士像もこの石材で造られています（2章参照）。これらの石材は鹿児島産のものとされ（神谷 1999）、近世末頃の石材搬入先として薩摩藩の存在を窺わせます。

また首里城周辺を中心に硯が多く出土します。これら硯の裏（硯背）にはしばしば产地・製作者・所有者などの銘が刻まれており、硯を研究する上で有力な材料となります（写真26）。銘から分かる产地には赤間関が最も多く、他に雨畠などがみられます。また生産年代は近世末から近代であることが銘の彫り方などから分かります。銘のない硯も本土の近世・近代遺跡出土の資料と同じ石材のものがほとんどで、出土硯の大半が近世から近代にかけて本土から流通されたものようだ。

一方で珍しい硯も僅かながら出土しています（写真27）。沖縄の歴史を考えれば中国産の硯も当然用いられていたはずですが、未だ明確な中国産の硯は発見されていません。今後の調査研究が期待されます。（大堀皓平）



写真26 産地や生産者の刻まれた硯

長州赤間関は現在の山口県下関市。雨畠は山梨県南アルプス市。富山関は不明。



写真27 特殊な硯

石は質の悪い石材を黒く塗装したもので近代の大量生産品、対して左・中央の硯は県内では類例がなく今後の調査が期待される。

第4章 いしに込めた祈り

-stone worship-

これまで紹介した石器や石製品・石造物などと異なり、先史時代の遺跡から出土する石製品の中には、実用的とは考えがたい製品も少なからずあります。おそらく、孔が開けられていることから装飾品と考えられますが、これらは何かしら特別な意味合い（例えば護符や信仰）を持つものではないかと想像させられます。当時の人々は、どのような思いを込めて、このような製品を作ったのでしょうか。

一方、グスク時代以降の遺跡からは、勾玉や玉も出土しています。これらは、単に装飾品として使われていたことも考えられますが、呪術や祭祀に関わる限られた人間が使っていたことも推測できます。

（金城貴子）

写真 28
縄文時代のさまざまな石製品
上：新城下原第二遺跡
中：古我地原貝塚
下：高瀬遺跡



写真 29 石製品 装身具（護符？）
(新城下原第二遺跡)



写真 30 彫刻石製品装身具（信仰？）
(古我地原貝塚)



写真 31 勾玉・管玉・丸玉
(左・中：首里城跡御内原北地区 / 右：嘉田地区古墓群 7号墓周辺)

【column5】 勾玉について

勾玉とは、全体が「C」の字形をなし、丸く膨らんだ頭部に孔を開けた製品を指します。材質には、ヒスイ・碧玉・メノウ・蛇紋岩・滑石・ガラスなどがあります。日本本土では縄文時代に登場し、弥生時代から古墳時代に隆盛を迎えるとされ、一般的には装身具と考えられています。

沖縄における勾玉の出土例をみると、初現は12世紀頃（那覇市の那崎原遺跡Ⅲ層出土の土製の勾玉）と考えられ、グスク時代～近世に位置づけられるグスク（スク）や集落遺跡及び祭祀遺跡などから出土しています。つまり、日本本土での勾玉の帰属年代と沖縄での出土状況には相当の時間差があることがわかります。

次に沖縄における勾玉の用途については、琉球王国神女であるノロの首飾りなどに勾玉が使用されている例もあることより、単に装飾品としてだけでなく、祭祀に関係するアイテムの可能性も考えられます。

この好例として紹介したいのが、南城市知念に位置する世界遺産斎場御嶽です。ここは王國の安泰を祈願する琉球王国最高の聖地として琉球王国の神女の中で最も位の高い聞得大君の就任式である「御新下り」が行われました。また、ここは国王や聞得大君が知念・玉城の御嶽を巡礼する「東御回り」の参拝地の一つとなっていました。内部には大庫理、寄満、三庫理など6つのイビ（神域）があり、整備にかかる調査により、三庫理からは勾玉（金製・ヒスイ製・ガラス製）、青磁、錢貨がまとまって出土しました。これらは、琉球王国における信仰を考える上で貴重な資料として、国の重要文化財に指定されています。（金城貴子）

写真32 勾玉など
(一部ガラス製品を含む)

上段：左より

カンドウ原遺跡、首里城跡
御内原北地区、木曳門地区、
天界寺跡、首里城跡二階殿
地区、御内原地区

下段：左より

カンドウ原遺跡、
首里城跡御内原地区、アラ
スク村跡遺跡、首里城跡表
探、御内原北地区（管玉）



写真33
斎場御嶽から見つかった勾玉などの出土品
(南城市教育委員会提供)

主な参考文献一覧

- ・沖縄県教育委員会 1985「金石文—歴史資料調査報告書Vー」『沖縄県文化財調査報告書』第 69 集 沖縄県教育委員会
- ・加藤祐三 1985「奄美・沖縄 石器・鉛物図鑑」新星出版
- ・比嘉寛 1985「文様にみる古琉球の思想—日輪双鳳雲文の成立を中心にー」『琉球の歴史と文化 山本弘文博士還暦記念論集刊行委員会
- ・沖縄県教育委員会 1988「首里城跡—欽賀門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査ー」『沖縄県文化財調査報告書』第 26 集 沖縄県教育委員会
- ・當眞嗣一 1988「グスクの石積について（上）」『文化課紀要』第 5 号 沖縄県教育委員会文化課
- ・安里進 1991「琉球王国石碑文様の変遷—日輪双鳳雲文から宝珠双龍雲文へー」『浦添市美術館紀要』第 1 号 浦添市美術館
- ・鈴木道之助 1991「図録・石器入門事典：甕文」柏書房
- ・沖縄県立博物館 1992「城（グスク）—城に語りたい地域の歴史ー」沖縄県立博物館
- ・當眞嗣一 1994「火矢について」『南島考古』第 14 号 沖縄考古学会
- ・上村俊雄 1998「南西諸島出土の石巖と黒曜石—その集成と意義」『人類史研究』10 号 人類史研究会
- ・那覇市教育委員会 1996「那崎原遺跡—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告ー」『那覇市文化財調査報告書』第 30 集 那覇市教育委員会
- ・大濱永亘 1999「八重山の考古学」先島文化研究所
- ・神谷厚昭 1999「石材と人間の既往的・歴史的関わり」『沖縄県立博物館紀要』第 25 号 沖縄県立博物館
- ・知念村教育委員会 1999「国指定史跡瀧場御嶽—整備事業報告書（発掘調査・資料編）ー」『知念村文化財調査報告書 第 8 集』知念村教育委員会
- ・沖縄県教育委員会 2000「旧内宮寺美術工芸関係資料調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書 第 140 集』
- ・江戸遺跡研究会（編）2001「図説 江戸考古学研究辞典」柏書房
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2002「天界寺跡（II）—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査ー」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 8 集』沖縄県立埋蔵文化財センター 2002「天界寺跡（II）—首里城寺跡—遺構確認調査報告書ー」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 10 集』
- ・新里亮人 2002「滑石製石鍋の基礎的研究」『先史琉球の生業と交易』熊本大学文学部
- ・岸本竹美 2003「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『天堀を冲縄地理紀要』第 1 号 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2003「首里城跡—右奥門及び周辺地区発掘調査報告書ー」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 14 集』
- ・財团法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室 2003「沖縄県史各論編 第二巻 考古」沖縄県教育委員会
- ・小畠弘巳 盛田勲・角進道 2004「琉球列島出土の石巖石製器の科学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』No.4 石器原産地研究会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2004「首里城跡—城郭南側下地区発掘調査報告書ー」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 19 集』
- ・高宮廣衛・知念勇輔2004「（沖縄後期文化）考古資料大観 11 卷 小字館
- ・浦添市教育委員会 2005「浦添ようどれの石の树と石碑—遺跡調査の中间報告ー」浦添市文化財調査研究報告書
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005「ナカンダカリヤマの古墓群—急傾斜地に壇危険区域内埋蔵工事に伴う発掘調査報告書ー」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 26 集』
- ・久保孝一・安和守史 2005「沖縄の石積み」「沖縄の土木遺産—先人の知恵と技術に学ぶー」社団法人 沖縄建設協議会
- ・宮城弘樹 2005「第 6 部 今帰仁城跡屋敷勾玉について」『今帰仁城跡周辺遺跡 II 今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告書ー』今帰仁村文化財調査報告書 第 20 集 今帰仁村教育委員会
- ・大庭皓平 2006「先史沖縄人の居住性—縄文時代後期から弥生時代中期併行層における石器石材ー」『南島考古』第 25 号 沖縄考古学会
- ・熊野正也・川上元・谷口榮・吉泉弘（編）2006「歴史考古学を知る事典」東京堂出版
- ・小野正敏・佐藤信・船野和己・田辺滋大編 2007「歴史考古学大辞典」吉川弘文館
- ・新里貴之 2007「南西諸島出土のヒスイ製品」『南島考古』第 26 号 沖縄考古学会
- ・北京故宫博物院 2008『故宫收藏 脊椎动物の玉器』藝術家出版社
- ・国立故宫博物院（編）2008『故宫勝概 新編』
- ・鈴木淑夫 2009「石材の事典」朝倉書店
- ・上原静 2010「琉球紙石考」『南島考古』第 29 号 沖縄考古学会
- ・大庭皓平 2010「先史沖縄における磨製石斧製作—戰略東とその選択ー」『南島考古』第 29 号 沖縄考古学会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター（編）2010「首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（1）ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集
- ・山野ケン陽次郎 2010「琉球列島出土那亜貝製品の製作技術に関する研究」『熊本大学社会文化研究』vol8 熊本大学大学院社会文化科学研究科
- ・南城市史編集委員会 2010「南城市史 総合版（通史）」南城市教育委員会
- ・有鎧倫子 2011「沖縄県内における遺跡出土硯」『南島考古』第 30 号 沖縄考古学会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター（編）2011「鏡水其原A遺跡—那覇西道路建設に伴う発掘調査報告書ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 57 集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター（編）2011「中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集

沖縄県立埋蔵文化財センター 催しのご案内

企画展

重要文化財公開

首里城京の内跡出土品展

「東南アジアと琉球」

平成24年1月28日(土)~2月12日(日)

今回は東南アジア各地の陶磁器類がテーマです。独特の形態や用途を持つこれらの製品を切り口に、大交易時代に琉球が展開した南海貿易の様相に迫ります。

文化講座

第 49 回

第49回 平成24年1月28日(土) 大交易時代を支えたタイ陶磁 講師:向井 瓦(東南アジア考古学会)

海を渡ったベトナム陶磁

講師：矢島 律子（町田市立博物館）

第 50 回

平成24年2月12日(日) 聖域へのアプローチ
～考古学から何が見えてきたのか～

コーディネーター：當眞嗣一

(元沖縄県立博物館館長)

講師：大城 秀子（南城市教育委員会）

金城 龟信（当センター）

山本 正昭 (当センター)

平成 23 年度企画展
「沖縄いしの考古学」

2011(平成23)年10月18日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

住所 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7

電話 098-835-8751（代表）・8752（講習班）

FAX 098-835-8754



URL: <http://www.maizou.okinawa.gr.jp>

開所時間：午前9時～午後5時（入所は午後4時30分まで）

休 所：每週月曜日・年末年始（12月28日～1

国民の祝日（子供の日）

駆雪の日（6月23日）

*曜日と月曜日が重な